どうして僕を?

熱帯夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どうして僕を？

【Ｎコード】
Ｎ３９３５Ｆ

【作者名】
熱帯夜

【あらすじ】
その学校には変わった生徒副会長と変な電波少女がいました？（笑）

序章

彼は告白をされた時、かならず相手に問う――――――

『どうして、僕を？』

たいていの女子なら同じことを繰り返す。

『一目惚れ』『憧れ』『もっと仲良く』

等と、漫画などでもよく聞く答えをする。

実際に顔は良く、運動神経抜群、成績優秀ときている

あまり人とは関わらず、孤独を好む性格。

少し目つきが悪い所を除けば、人にしては何もかも完璧な人間といっても良いだろう。

ちなみに二年生で生徒会副会長に所属しており、彼を知らぬものは誰見ないときており、学校外からでも人気がある。

そして、

今日も目の前にいる相手に問い掛ける――――

『どうして、僕を？』

1章の1話

「和也先輩っ！　宜しければ、私と付き合ってもらえませんか？」

彼の――――木之元和也の目に前にいるのは1人の後輩だった。

彼女は和也との接触はあまり無く、もしかしたら面と向かって話すのは今日が初めてかもしれない。

見た目はごく普通でクラスにもよくいるタイプのように見える。前髪で顔を隠しているが、顔を赤らめているのが傍から見ても分かる。

だが、そんなことを気にすることも無く、和也はいつもの対応に取り掛かる。

「どうして、僕を？」

相手のほうも噂でよく耳にしていたのか、すぐ答えを出す。

「えっと…それは、前から見ててかっこよく……」

最後まで言わないまま口ごもり、2人の間にしばらくの沈黙が訪

れる――――――

先にその沈黙を破ったのは和也の方だった。

「本当に、それだけ…？」

「え？」

次の言葉で振られると覚悟していたらしく、間抜けな声が出てしまう。だが、すぐに気を取り戻し、しっかりと和也の顔を見ながら言葉を紡ぐ。

「……言っても良いんです…か？」

「どうぞ」

「ホントに、ホントに…引くかもしれないんですよ？」

「これから振られるかもしれない相手に別に引かれてもいいんじゃない？」

その言葉を聞き、目に前の相手は考えるように手を口に添える。しかし、それも少しの間で、すぐに手を下ろす。そして、和也に向き直り口を開く――――――

その一瞬見せた真剣な目に和也は惹かれ――――――

「あたしの好きな人に、似てるからっ！！」

「！？」

彼女の意外な言葉に目を丸くする。

彼女――――岩山射頭夢の目は――――

これでもかという位に光っていた

1章の2話

たった今告白された相手は――――電波少女だった――――――

「いや、だから似てるんですって！　そのクールで孤独ＬＯＶＥってとことか！　あとちょっと裏がある？　影の部分を持ってたりしたりして。でもそんな性格なのに学校に貢献しようとして生徒会やら何たらやるとことかがもう、そっくり過ぎで！　好きになっちゃったってゆーかぁ、萌ちゃったってゆーか――――」

いきなり自分の真実を話したと思うと、次は自分の意見を息継ぎもしずに早口で喋っている目の前の相手――――その名も岩山射頭夢。

今では前髪を掻き分け、キラキラと輝く瞳を和也の前に晒している。落ち着いた性格に見えていたと他人に喋っても信じてもらえそうも無いくらいの変わり様だった。

和也はその姿をただ呆然と見つめることしかできなかった。

1人、なおも喋り続けている射頭夢との間に、お次は奇妙な――――微妙な空気が漂う。

「――――…ですからにしてですね……うがぁっっ！？」

その空気を察したのか、射頭夢は一気に顔を赤くして自分と自分の手を絡める。

「あのぉ…すいません……。ちょっとでしゃばっちゃったっていうか、調子に乗り過ぎたというか、舞い上がってしまったというか、上がり過ぎました…」

射頭夢と名乗る少女はいつの間にか前髪をまた下ろし、目を隠しながら時折りチラチラとこちらを度々伺っている。

２人の間に、気まずい空気が流れ続ける。

1章の3話

「…つまり、僕はその漫画家なんかのキャラに似てるってことでいいんだね？」

「正確には小説です。今度読みます？」

２人は学校近くのファミレスにいた。
射頭夢の方はケーキやらジュースを頼んでいるのだが、和也の方はコーヒー一杯しか見られない。

「先輩ケーキ食べないんですか？　ここのって意外と美味しいんですよ？」

「僕は甘党だけど自分で作って満足したのしか食べないよ」

「わー！　それもどっかの小説にあったな！　確かそれはマーマレードだったけど…」

時間は数時間前に遡る――――――

「クスックハハハハハッ！！」

突然の笑い声に身を強張らせる射頭夢。

和也の今までに無い笑い声に「あああ。自分はもうダメだ終わった」などと心の中で叫んでいる。

だが、和也の笑い声もつかの間まだ腹を抱えているが、涙を拭いながら射頭夢に向き直る。

「フフッ　いいよ、付き合ってあげても。これほど面白い子に会ったのは中学以来だね」

「えっ！？　じゃあ良いんですか！　似てるからって理由で告白したのに…！」

目を丸くして驚いてはいるが、顔を少し赤らめながら聞く。いつの間にか、またも前髪を書き上げ、目を輝かしている。

「良いって言ってるでしょ。…放課後迎えに行くから、またあとでね」

そう言って和也は校舎の中に入っていった――――――

そんなこんなで色々あって現在にいたる。

ちなみに学校に近いファミレスにいることにより、同じ学校の生徒がこちらの方を珍しそうに見ている。とはいっても、和也が射頭夢を教室まで向かいに行ったことから生徒の約半分にまで広まっていたのだが――――。

「いやー。　まさか先輩と付き合えるとは夢にまで見てなかったですよ」

「別に…。そんなたいした事でもないでしょ」

「いえいえ滅相も無い！　もう凄いことですよ！」

「分かったからさっさとそれ食べちゃって？　帰り送ってかなきゃなんないんだから…」

「まじすか！？　うわー、さっさと食べちゃわないと！」

そう言って2人の会話は一旦打ち切られる。

「今日はどうも有り難うございました！　色々、話させてもらえてよかったです！」

「こっちは疲れたけどね」

「うう……」

日はもう殆んど落ちて、辺りには闇が広がりかけている。

射頭夢は自分の家につくまでずっと喋り続けていた。

和也は殆んどを聞き流していたが、射頭夢はそれでもご立腹のようだった。

「それじゃ、僕はもう帰るから」

「はい！　それじゃ――――」

射頭夢が別れを告げようと挨拶をしかけたが、その言葉は和也によってふさがれる。

その状態がしばらく続き――――

和也は振り向かずに帰っていった。

そのまま硬直状態が続いてた射頭夢だったが、冷たい風が吹くと同時に我に帰り、顔を真っ赤に染める。

「うわーわーヤバイヤバイ！　帰って早速オナろ！」

そう叫びながら家の中に入っていった。

2章の1話

「うぅ…ん……ぁああっ！」

そう声をあげながら海老のように体を反らす。

暗い部屋に荒い息遣いだけが誰かがそこにいる事を教えさせる。

だがその息遣いも次第に収まっていき、誰かいるのさえ分からなくなるほど静寂が訪れる。

「ぅう……今日はここまでかな…」

そう声が聞こえてきたのと同時に、一瞬にして暗闇に光が掛かる。

――――射頭夢は着ている服をパタパタと仰ぎながら、ベットに勢いよく腰をおろす。

体は少し湿っており、顔が赤く火照っている。

腰をおろした状態で深呼吸を繰り返し、しばし目を閉じ、時間が止まったように静止をする。

だがそれもつかの間、目をキラキラさせながら顔をあげ、声を上げる。

「うきゃー！　凄い！凄いよ先輩！　いつもの五倍はイけたよー気持ちかったよー」

部屋で一人大きな声をあげて足をばたつかせる。
顔は先ほどより赤くなっており、顔全体を侵食している。

「やっぱリアルの方がくるもんだね、うんっ！
……でもさ、付き合うとなったらやっぱヤりたいもんだよねー。普通にヤるのはな。なんかあたしには似合わないって感じ！　はじめはやっぱコスプレイ？　キャーキャー！　いいねいいねぇ！　あーなんか想像して興奮してきた！　いや、想像じゃなくて妄想かな？　どっちでもいいやそんな事！
するならやっぱ手始めに学ラン＆セーラー？　モデルのあの人が学ランだしねっ！　確かセーラーだったし…。用意しなくっちゃ！
さ、メールメールっ」

とてつもない独り言を言ったあと、携帯に手を伸ばし、誰かにメールをしている。

「うふふ…楽しくなってきたぞ！」

そう言いながらメールを終わらせ、風呂に入るため、部屋を出てった。

2章の2話

「やぁ。　この寒い中１２分４１秒待たしてくれた君を一体どうしてやればいいのかな？」

「あああ……できれば『そんな君が好きだよ』と言ってチューをしてくれれば嬉しいんですけど」

「フフフ、朝から君は僕を楽しましてくれてるね。半殺しまでならいくらでもしてあげて良いんだよ？」

「スイマセン。ナマいってスイマセンでした。おはようございます」

「おはよう」

そう言って一組のカップルは歩き出す。
１人は自分の好きな人（漫画ｏｒ小説のキャラ）に似ていると言う理由で。
もう１人はそんな彼女が面白そうだと言う理由で。
そんな理由で２人は付き合いだした。

しばらく２人は無言で歩いていた。
風が冷たい空気を運び、息は白く、２人の頬がピンク色になっている。

沈黙を破ったのは、珍しく和也の方だった。

「言うの忘れてたけど、僕と付き合うには、それなりの覚悟はしてもらうよ」

「へ？」

射頭夢は何かを期待しているような、または何か危険を感じた顔をして和也の方に顔を向ける。

和也は射頭夢のそんな顔を見て楽しそうにクスリと笑う。

「安心しなよ。君が期待してる事にかんしては優しくしてあげるから…。ただね、ちょっと僕に敵意を向けてくる人たちが多くてね」

「……先輩やっぱりそういうヤンキーとかに絡んでいたんですね」

「君が思ってるくらい僕はそんなのにむやみに顔は突っ込まないよ」

「じゃあなんなんすか？」

訝しげな顔をうかべ、和也の方を向いたまま首をかしげる。

和也は少し「痛そうだね」と感想を述べたあと、射頭夢の質問に答えた。

「弟…弟がね、色々と僕に汚いものをぬぐり付けてくるんだよ」

そう言って射頭夢の方を見る。

射頭夢の顔は———光り輝いていた。

「先輩弟いたんですか！？　これは新展開！！」

そう言いながら自分の額を平手で軽く叩く。

「あちゃー！　そういう設定考えてもみなかった！　兄弟…そう、兄弟だよ兄弟！　いい！　それいいよ！」

1人先走る射頭夢を和也は———無視していた。

2章の3話

「ああぁ…ですから先輩ごめんなさいってばぁ！　シカトしないでください、そんな痛い目でこっちを見ないでください！　その時点で私の心はズタボロです！」

あれからずっと射頭夢が独り言をぶつぶつ呟いており、気が付いたら学校は目の前にあり、和也のほうは完全に射頭夢の存在を消して歩いていた。

射頭夢がそれに気付いたのはついさっきの事で、今は泣き叫びながら和也にしがみついている。

「もう校門通りすぎちゃいましたよ！　せっかく付き合いだしたのに、皆に私たちの愛を見せ付けられないじゃないですか！　困難じゃ昨日の事は嘘になっちゃじゃないですか！　せっかく自分でも噂広げたのに！　私のこの努力は何ですか！　昨日のオナはなんだったんですか！」

ついには口では簡単に喋ってはいけない事まで言い出したので、呆れたような顔をして和也は足を止める。

射頭夢はいつの間にか半泣き状態になっており、顔をぬぐり付けていたのか、少し和也の制服が湿っている。

「うぅ、先輩…御免なさいって、言ってるじゃないですかぁ……」

ついに本気で泣き出す射頭夢。

まだ登校している生徒は見当たらないが、さすがにここに放って

置くわけにはいかない。

―――一体この子は何なんだ？

どうして自分はこんな子に惹かれてしまったのか少し後悔しながら、すうと射頭夢の涙を自分の袖で拭う。

射頭夢は一瞬ビクッと体を震わせるが、静かに口を開く。

「…ぅう……セン、パ…イ……ぅごめ…な…さ…い」

「…もういいよ。　今回だけは許してあげるから、とりあえず泣くのはやめて」

ため息混じりに射頭夢を許す。

射頭夢は鼻を鳴らしながら「有り難うございます」と言い暫く黙っていた後、

「じゃ、もう大丈夫だよね。今日は委員会があるから、終わったら自分の教室で待ってて」

と言い残し、先に校舎の方に入っていった。

2章の4話

「よーう、射頭夢ー。どうしたん机に伏せって？」

射頭夢のクラスで2番めに来たのは、成瀬詩織だった。
彼女は多分射頭夢の1番の話し相手で、色々とお互い相談やら雑談をよく交わしている。頭はかなり悪いが、運動はなかなかのもので、そこんとこは射頭夢も一目置いている人物だ。
活発で性格もよく、男子に好かれるよりも、女子に好かれる事の方が多い。

今日は、昨日射頭夢のメールにて早く来るよう言われたので、苦手な早起きをしてわざわざ射頭夢のためにいつもより早く来た。

「どーしたんだよオイ。例のことは聞いてるぞ？　てっきり今日は朝早くから自分の自慢話でもすんだろうなー思って来てやったのに、なんかあったなら言ってみ？」

そう言うと、射頭夢がむくりと顔を上げる。
その顔は少し目が腫れており、不機嫌そうな表情をしていた。

「聞いてくれよしおりん。…愛しの和也先輩と付き合った言ったろ？　んでちょっと朝調子こいたらシカトしてさ……ウチもう悲しくって悲しくって……」

「おうおう、そうかそうか。で、そんだけ？　あんたはそんな事では落ち込むような子じゃないって思ってたけど」

「さすがしおりん。よく分かってるね。んでちょっと泣いてみたんだけどさ、言う事だけ言ってウチ一人置いて先に校舎入ってったんだぜ？　そこはさー、抱きしめるやらチューすとやらのとこじゃないの？」

「んなもん知るか。…あれじゃねえの？　どうしたらいいか分んなかったとか、そうゆのじゃね？」

「そこは抱きしめておくもんだろ…」

「はいはい」

詩織は苦笑交じりに射頭夢の頭を撫でる。
射頭夢は満足した顔で、

「寝る」

と言ってそれから一言も話さなくなった。

「…俺の朝を返せ」

そう言って詩織も夢の中に落ちていった———

2章の5話

射頭夢が教室で寝ていた頃――――

「なあ和也。お前一難と付き合ってるってほんとかよ？」

「何でお前急に付き合いだしたわけ？　そんなにも可愛かったの？」

「木之元君。どうしてあの子と付き合うの？」

「そうよ。可愛いなら、梓の方がよっぽど可愛いでしょ？」

「梓泣いてたよ？　考え直してもいいんじゃない？」

同じ学年の生徒が多数集まって和也に質問の嵐を繰り広げていた。和也はそれでも周りを気にせず、ずっと本を読んでいた。額に血管を浮かばせながら。

梓と言う名前は、以前和也に振られた女子の名前である。成績は和也と並んで優秀。容姿も文句の付けようも無いほど完璧で、校内のマドンナ的存在だった。

ちなみに和也と同じく、校外でも有名な一人である。

「大体お前、どうコクられたワケよ。いつもは理由聞いておしまいなのにさ」

「そんなに煽てられたんかぁ？」

和也の沈黙には気にせず、次々と質問が飛んでくる。

それほど事は大きかったのだろう。

あのマドンナをふっといて、名も知れない一つ下の後輩と付き合うこととこった事が――――

「俺そいつ見てきたんだけど、案外普通だったぜ？」

「俺も。なんか寝てたけど可愛いとか別になんとも思わんかった」

「はぁ？　それどういうこと？」

「ねぇねぇ、ホントにどうして付き合ったの？」

ついに怒りがピークに達成し――――

「……君達…いい加減五月蝿いよ」

低く低く――――何かがこみ上げるのを抑えながら口を開く。

質問していたにも関わらず、少し人が離れていく。

彼の纏っていた空気に絶えられなくなったのだろう。

噂は噂だが、暴力団に関わってると聞くほど喧嘩等に強い男だ。

彼らはそのことなどすっかり忘れて彼を質問攻めにしていたのだ。

彼の声を聞いて――――纏う空気に触れて改めて自分たちが今関わろうとしていた人物の偉大さを思い知らされる。

「ご、ごめん！　俺ちょっと調子乗ってた」

「俺も…」

「あああたしも梓の名前とか勝手に出しちゃったし…」

「ホントに、ごめんね？」

周りがそう言いだし、そそくさと自分の席へ———教室へ帰っていく。

だが最後に残った一人が、

「じゃあさ、一つ答えて？」

「？」

天然なこの生徒は和也の許可を聞く前に質問をする。

「そのこの名前って何？」

「……岩山射頭夢」

「そう。サンキュ」

そう言い残し、先ほどの者たちのようにそそくさと自分の教室に帰っていった。

全員が自分の周りにいなくなったことを確認すると、椅子に座り直し、静かに、また本に目を向けた。

「なあ、岩山射頭夢って知ってる？」

「さあ？　俺は知んないけど？」

「和也の彼女なんだけど…」

「へえ。そんなこいたんだな…」

「……お前ら…今、岩山射頭夢って…」

「？　言ったよ」

「何？　お前知ってんの？」

「……詳しくは言えんが、あんま関わらない方がいいぞ」

「…？」

3章の1話

時間はあっという間に過ぎ、校舎の中をオレンジ色に染め上げ、自分たちの生徒会に間に合おうと、小走りに走っている生徒たちが見受けられる。

和也はコツコツと足音をたて、生徒会室に向かっていた。
ちなみに射頭夢とは朝別れてから会っていない。
あれから色々と考えたのだが、どう会えばいいのか、何を言えばいいのか全く思いつかなかった。
そう考えているうちに生徒会室につき、扉の前で足を止める。

ドアノブに目を向け、ポッケトの中から静電気処置機を取り出し、ドアノブに近づける。
その瞬間、何かが弾けるような音が出てきたと思ったらそれは一瞬の事で終わる。
和也は暫く止まっていたが、もう何もないと察すると何事も無かったようにドアノブに手をかけ扉を開く。

「珍しいね。君がぎりぎりの時間に来るのは」

出迎えたのはほかの生徒会メンバー。声を掛けたのは生徒会長の城西院（じょうせいいん）　爾（みつる）である。
和也ははあとため息をついた後に、

「…別に良いじゃないですか。早いが遅いが僕の勝手です。あと、

ドアノブに静電気を仕掛けないでください」

「何ですかつれないですね。私はただ純粋に君の驚く顔が見たくてやっただけですのに。ちなみにそこを撮って売りまくろうとしただけ…ただそれだけですよ」

「そういうことをあっさり言わないでください」

顔立ちは綺麗に整っており、見るもの全てを虜にしてしまいそうな顔をしている。

いつも穏やかな笑みを浮かべており、誰に対しても敬語を使う。

和也意外には優しく接しており、和也以上に名の知れた人物である。

「そんなことより、君、付き合ったみたいですね。どうです？楽しいですか？」

「別に…扱いが難しくて疲れるだけですよ」

「アハハ…君がそう言ってられるのは今のうちですよ？　その内毎日毎日、２４時間彼女の事が気になって気になってしょうがなくなって……」

「どういう意味ですか？」

全く崩さない笑顔に対して睨みながら和也は質問する。

だが爾は肩を竦めて、

「さあ。どういう意味でしょうねぇ？　会議を始めましょうか」

そう言って和也の席につけと促す。
和也は爾を睨みつつ席に座り、目の前にある資料に目を移す。

「さて、会議を始めましょうか」

「だー…生徒会って何時終わるんだぁ？」
机に頬ずりしながら射頭夢はうなだれる。
朝の事はもうすっかり気にしておらず、一人誰もいない教室で飴を咥えていた。

「遅いかな？　遅いのかな？　どんだけまっとりゃいいんじゃ…」
口に含んでいた飴を音を立て噛んでいたが、廊下からほかの音が近づいてくるのに気付く。
それは足音で、射頭夢の教室前でぴたりと止まり、扉が開かれる。
「…射頭夢ちゃん、だよね？　ちょっと話があるからついて来てくれないかな？」
一見穏やかそうな表情をして入ってきた女子生徒が射頭夢に声を掛ける。
射頭夢はその生徒を知らなかったのだが、
「ん。まだ時間掛かりそうだし、暇だから良いよ」
そう言って机から身を起こし、女子生徒とともに教室から出る。
並んで歩きながら女子生徒は申し訳そうな顔をして射頭夢に話し掛ける。
「ごめんね。彼氏とか待ってたの？」
「そんなとこです。でもちょっと位困らせたっていいですよ。そう思いません？」
「ふふ、そうかもね」
柔らかい笑みを向け、射頭夢との反対側の窓を見つめる。
凶悪な顔をした後、これからする事を想像したように、楽しそう

な顔を浮かべる。

対する射頭夢も、先を見たように楽しそうな顔を浮かべてていた。
ただし、彼女とは違い、これからジェットコースターに乗る子供のように純粋に目を輝かしていて笑っていたのだが――――

3章の2話

「あの、沙希ちゃん？　一体どこに行くんですか？　こっちには体育館しかないはずなんだけど」

「うん。体育館に行くの」

先ほど聞いた名前を呼びながら、射頭夢は困ったような顔をして沙希と名乗る女子生徒に声をかける。

沙希の方もそれなりの対応をしながら、体育館に向かって歩を進める。

そうしているうちに校舎を抜け、体育館前の玄関に入っていく。

「体育館って言っても…ああ！？　あれですか！？　裏に誘ってレズ発言とかですか！？　すいません！　私にはまだ入り込めない境界ってモノがまだあってですね…。出来ればお返事はかなり待ってもらわないと困るんですけど…」

「そんなんじゃないから！！　断じてそんなんじゃないから！！」

初対面を気にせず問題発言をする射頭夢に、初対面に関わらず大声で否定を沙希はする。

そう言っている間に足はどんどん進んでいき———倉庫に辿り着いた。

「さ、はいってはいって」

「いや、こんなとこに入れられても。まるであたしがここでリンチ

されるみたいじゃないですか？　すばらしいシュチュエーションですね。ベタですね」

そう言いながら入ると、いきなり後ろのドアが閉まる。

そして後ろから、沙希とは違う声がした。

「そう、あなたはここで苛められるの。あと、ベタで悪かったわね！」

そう言い終わると同時に射頭夢の背中を強く押し倒す。

「ムギュ！！　ベタだ！！　ベタ過ぎる展開だぞこれぇー！！」

「うっせぇこのアマ！！」

そう言って足元にあらかじめ用意していたパイプを拾い、盛大に振り上げた。

「うわわわっ！！　マジだ！！　この人目がまじだぁぁぁー――！！」

そう言って大きな悲鳴が倉庫に響き渡った。

窓からはその光景をずっと見つめているかのように太陽が枠の中にすっぽり入って見えた。

3章の3話

「はい、じゃあ今日はもうお開きにします。最初に言った文化祭の件ですが、各クラスの室長にしっかり伝えておくよう忘れないでくださいね。お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

そう言い終わって、二人の生徒だけを残してほかに生徒達は教室を出て行く。

残った二人の間に思い沈黙が流れたのだが、爾を睨みつけながら和也が声をかける。

「で、一体何なんですか。会議中何度もこっち見て…話があるんならあるって言ってくれればいいじゃないですか」

「いやー君がどれくらい僕と心が繋がっているか気になりまして。以心伝心…と、言っておきましょうか」

不吉な笑みを浮かべている爾に拳を向けて和也は物語らせる。

それを見て爾は降参というように両手を軽く上げるが、笑みは崩さない。

だがすぐ両手を下ろし肩をすくめながら和也に問い掛ける。

「君が何かに悩んでるように見えましてね。少し気になりましたので話だけは聞いてさしあげようと思いまして」

「余計なお世話です」

「そういうこと言わないでください。少しは楽になると思いますよ」

和也は訝しげな目で爾を見つめるが諦めたように今朝の事を話す。

「……そうですか。それは災難だったでしょうね…」

「どこがですか」

「彼女の方です。岩山さんですよね？　そりゃ彼女なら悲しみますよ。あなたの後々の行為にも」

「どういう事ですか」

腕を組んで一人頷いている爾に目を向けながら話を続けるように促す。

「私の情報によれば彼女はかなりの異常性の持ち主です。今朝あなたがやったようなマイナーな事が認められなかったのでしょう」

「じゃあどうしてあげればよかったんですか？」

「そうですね…。最低で『愛を込めて抱きしめる』。最高で『押し倒す』。そんなところでしょうか」

「『押し倒す』ってどういう意味ですか」

「いちいち私にそのような事を喋らせないでください。興奮しますよ？」

「死んでください」

そう言ってもう用は無いというかのように部屋を出ようとする和也に爾は「待ってください」と引き止める。

「先ほどの話によると彼女…教室で待ってるはずですよね？」

「？　そうですけど何か？」

「さっき廊下歩いてましたよ？　窓から見えませんでしたか？　君の愛は…所詮そんなものなんですね。ちなみに彼女にはもう一人誰かがついていました。そうですね…たしか一年の川本沙希さんでしょうか」

「何で分かるんですか」

「そりゃ、生徒会長ですから」

いい笑顔で返す爾に対し、和也は心底嫌そうな顔をする。

「そんな嫌そうな顔をしないでください。ちなみに私の情報を推測を掛け合わせますと彼女…岩山さんですが、かなり危ないと思いますよ？」

「何でです？　からかうつもりなら殴りますよ」

「そういうところが好きです。……嘘ですスイマセン本当のことを話します」

「いい加減にしませんと本当に殺しますよ」

額に血管を浮かばせながら今まさに殴りかかろうとしている和也との間に距離を作りながらまた両手を挙げながら話を元に戻す。

「人間のやる事です。沢山の人に注目を浴びていた誰かさんがいきなり名も知れない一年と付き合いだしたんです。そりゃぁ嫉妬も何もありませんよ。しかも彼女達が向かっていた先なんて体育館のほかに何もありませんよ？　まさに苛めをする絶好の場所じゃありませんか。漫画とかにもよくありますよ？」

「そんな事知りません」

「そんなこと言っている暇があるのでしたらさっさと彼女の所にい

ってさしあげなさい。私が言ったこと忘れないでくださいよ？最低でも『愛をこめて抱きしめる』ですからね」

爾の言葉を最後まで聞かず、いつの間にか和也は教室を出て行ってしまっていた。

爾はやれやれといった風に腰をおろし一人呟く。

「…とは言いましても、彼女なら大丈夫だと思うのですが」

誰にも聞こえないように、自分でも聞こえないくらい小さい声で

――――

「私の情報によれば…ですけれど」

3章の4話

「もう…こんなもんだろ」

息を切らして立っている女子生徒の足元には数本のパイプと――射頭夢が力なく倒れていた。

あれからかなりの暴行を加えられたらしく、生々しい痣が無数につけられている。

倉庫に入ったときは先ほどの女子生徒一人と見受けられたが、まだ数人隠れていたらしく今ではその数人で射頭夢を取り囲んでいた。

射頭夢を初めに傷つけたた彼女がこの中でのリーダー格らしく、他の女子生徒を代表して倒れている射頭夢に言葉を投げつける。

「何で…何であんたがあの人と付き合うなんてこと出来るんだよっ！　うち等は見てることしか出来なかったのに…。こんな事になったのもあんたっ…自分のせいなんだかんねっ」

また、言い終わると同時に即座に拾い上げたパイプを射頭夢の肩に叩きつける。

射頭夢は小さく悲鳴をあげ、一時停止していたように見られたが、やがてカタカタと震え出す。

その姿を見ていいように思ったのか、周りの生徒たちが口元を吊り上げる。

「調子乗ってたお前が悪いんだよ！」

「もっと似合う人だったら納得も出来たのに…名の知れないお前が何で」

「何でお前が付き合うんだよっ！！」

大声で自分の気持ちを射頭夢にぶつけていく。

気持ちと一緒にパイプもかざしては勢いよく下ろし、下ろし。それを何度も繰り返す。

射頭夢はそれでも力なく倒れており、意識があるのかどうかも分からない。

その光景を見て満足に思ったのか、パイプを床に下ろし射頭夢の噛みを掴み上げ顔を無理やり上げさせる。

「分かったんなら…さ、別れちゃえよ。そのほうが楽だし、もうこんなことされないよ？」

上から見下すような視線を向け射頭夢に話し掛ける。

対する射頭夢は目を虚ろにしていたが自分の返事を待つような言葉に反応して光を戻す。

そして———笑った。

それを見て一気に周りの女子生徒たちの頭に血が上る。

射頭夢は何かを楽しんでいるような顔と同時に、自分たちを哀れむような目を向けていた。

「このっ！ふざけんじゃ———」

射頭夢を掴み上げていた手を話すとパイプを再び握りなおし振り

かざして下ろ――――

そのパイプを射頭夢の手ががっしりと握っていた。

3章の5話

「うぉーいてて…あ、でもプラスチックで助かったわ、鉄やったらかなり効いたやろうな」

そう言って驚愕した表情をしているリーダーの前でムクリ、と射頭夢は立ち上がった。

「あ、アンタ…何で……」

声を振り絞って聞いた問いに射頭夢はニコリと笑顔を向ける。

「フフフ、驚きましたぁ？　品川（シナガワ）　里謡（リヨウ）さん」

「なっ！？」

いきなり自分の名を呼ばれ彼女―――品川里謡は更に目を見開く。そうしている内に射頭夢は掴んでいたパイプに目をやり絡みつくように手を捻らす。するといとも簡単に里謡の手からパイプを奪いバトンのように回し始める。

「更に驚きましたぁ？　まあこんな風にパイプを取るのは簡単なんですけどね。回すのも簡単です。こうやって手首をウリウリすれば、ほら！　あら簡単！」

暫く周りに見せ付けていたのだが、いきなりパイプの先を突き出し、リセットしたように里謡たちに話し掛ける。

「あたしゃ人は通す人間なのさ。そっちが被害者だから、ワザとここまで受けてあげたんさ。これでチャラ。ＯＫ？」

呆然としていた里謡たちだったが、射頭夢に話し掛けられ、我に帰ると射頭夢を睨みつけ罵声を浴びさせようとする。

「ふっ、ふじゃけんじゃないわよ！　なん―――」

言い続けようとした口にパイプを当てられ押し止めされられる。

「でもさ、人は通してもプライドは貫く主義なんだよ。だ・か・ら、君らにちょっと置いたしちゃう」

そう言い終えてパイプと手から離す。

パイプはそのまま重力に従って床に下ち、乾いた音を鳴らす。

里謡たちの顔が恐怖に染まっていくのを射頭夢は楽しそうに眺め、ポケットに手を突っ込む。

そして、初め沙希に連れられていた時の表情を取り戻し、楽しそうに声を張り上げる。

「さあさあさあ！！　これから、射頭夢ちゃんのお仕置きタイムだよぉー！！」

そう言ってポケットから勢い良く手を出す。

里謡達はそのポケットから取り出したものに口をへの字にする。

それは太陽の光を反射して一部が銀色に光っていた。

射頭夢がそれを窓から見えるオレンジ色の太陽にかざすと、いよいよ状況を理解した数人が顔を青ざめ、まだ理解できていない残りの者たちはポカンとしていた。

3章の6話

和也は走っていた――――。
廊下ですれ違う生徒達が頭を下げてくるが、それを気にせず廊下を走り続ける。

かなりの速さで走っているように見えたが、彼の息は切れておらず、汗さえ見受けれない。
当の彼も冷静を保っているが、内心――――心のどこかでは焦っていた。

全力で走ったせいもあって、体育館はもう目の前にある。
勢いよく館の中に入り、ロビーを突っ切って体育館場に入っていく。
周りには誰も居なかったが、倉庫の鍵が差しっぱなしになっているのに気付き歩をそちらに進めていく。
和也は鍵の差し込んだままになっているノブに手を掛け、勢いよく扉を開ける。

落ちかけた太陽の光を浴びながら、射頭夢は立っていた。
そのまま音のしたほうに顔を向ける。

「先…ぱい？」

首を傾げながら和也に問う。
その目は焦点の合ってない、どこか空ろな目をしていた。

和也はそんな彼女をしっかり見つめ、答えを返す。

「ああ…そうだよ」

答えを聞いてかすかに彼女の瞳に光が戻る。
そして和也のほうに向きを変え、ゆっくりを歩く。
だがその力は足らず、床に崩れかける。
前のめりに倒れかける射頭夢に和也はすぐさま反応し、射頭夢を抱き支える。
ゆっくりと腰を落としながら、楽な体制をとっていく和也に微笑し、射頭夢は言葉を紡ぐ。

「先輩。…射頭夢はやりましたよ。頑張りました。…それと、言われたこと守れなくてすいません。ちゃんと言うこと聞いていれば、こんなことにはならなかったはずなのに…」

「分かったから…黙ってて？」

「…はい」

そう言ってから射頭夢は静かに目を閉じる。
よく見ると顔にはいくつもの痣があり、彼女の痛みを生々しく感じさせる。

周りを見渡すと、奥の方で数人の女子生徒が倒れているように見える。
和也は一瞬どうするか躊躇ったが、外傷のひどい射頭夢を先に運ぶことにした。

和也は片膝をついて、立ち上がろうとする。

そしたら射頭夢の手から何か銀色のものが高い音を鳴らし床に落ちる。

和也はそれを見て――――

3章の7話

和也の頭の中を混乱が支配した。
【それ】は一つの虫眼鏡だった―――。
名探偵が持ってそうなくらいの大きさをしており、銀の色をしたふちが太陽の光をまぶしく反射している。

「先輩？　どうしたんで…ぬおおぉっ！？」

暫らく和也に抱かれていた射頭夢だったが、和也が行動を起こさない事に疑問を持ち、和也の見ている方向に目をそらした。
自分の手から転がった虫眼鏡を見た瞬間、目を見開いて素早く和也より先に虫眼鏡を手にする。

「な、何なんですかぁ！？　落ちたなら落ちたって言ってくださいよぉ！！」

頬を淡い赤に染めながら和也に怒鳴る。
和也はまだ状況を理解していないような目をして射頭夢に向き直る。
そして、誰もが思う疑問を初めに口にした。

「何で…虫眼鏡？」

そう問われ、虫眼鏡を大事そうに抱え、口を尖らせながら和也に言い訳をする。

「あ、あのですね。これは決して怪しい物じゃないんですよ？　ただ仲のいい人達が持ってたので自分も持ってて…」

「僕が聞いてるのは、何で虫眼鏡を手に持ってたか」

「うううぅ……」

和也の気圧されて、射頭夢は少し後ず去る。
だがじらしていても意味が無いと判断したのか、再び和也の前に出て、膝をついている和也の前に正座をして真剣な目で話す。

「これは…私の武器です」

「？」

再び和也の頭の中を、疑問が支配した———

「いや、あのですね。中学の時、先輩に伝授してもらって…。得意なんですよ。こう、光を集めるの」

そう説明しながら、コンクリートで出来た床に黒いコゲが出来ていく。
和也はそれを見てすぐに行動を起こす。
素早く射頭夢の手を握り、虫眼鏡を持った手を影に移動させる。
突然手を握られて顔を赤らめている射頭夢に対し、暗い顔で睨みつける。

「やめなよ。体育館が汚れる」

「あ、スンマセン」

目つきが悪いのを存分に発揮しながら低い声で射頭夢に注意する。

射頭夢は顔を青くしながら謝罪した。
暫らく黙り込んで虫眼鏡を手で弄んでいたが、はっと我に帰り和也に声をかける。
「そんな事よりもう帰りましょう！　そこに居る人たちは…まあ、気絶してる程度なんで大丈夫のはずです」
「何をしたの？　この子達に」
「虫眼鏡でちょっと髪を焦がしただけっすよ。『愛』『恥』『性』『笑』『禿』と、ランダムに描いてみました。……もうそこからは髪が生えてこないんですけどね。大丈夫でしょう。字、細いし。他が生えれば目立ちませんよ」
恐ろしい事を平気で言う射頭夢に少し恐怖した和也だったが、一つ、気になることに気付き、射頭夢に問いかける。
「ところでさ、君の傷は大丈夫なの？　さっきと比べて全く元気になってるじゃん」
「あう。それはですね…。『保健室に連れてもらっちゃって、そのままヤっちゃおう★☆大作戦☆★！！　的なことを計画していましてね、まあ結局マイ武器が落っちゃったんで、今になっちゃったんですけど」
「……君、殴っていい？」
「イヤン！　先輩のド・エ・すぅぎぁっ！？」
言い終わる間に射頭夢の体がまたもマットに叩きつけられる。

ただ前と違った事は、和也とともに倒れた事だ。
何時のまにか射頭夢の手は和也に掴まれ抑えつけられており、仰向けに倒れている射頭夢の上に和也が被さっている形となっている。

「そんなにヤりたいなら、ヤってあげるよ」

「え？…あ、う……？」

予想外の展開に射頭夢はまともな言葉が喋れなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3935f/

どうして僕を?

2010年10月16日14時37分発行